

愛と藍とさくら

国立長寿医療センター研究所 池田 恭治

今日は11月11日。1年は早い。東海地方も、ついこの間まで、暑いなか愛知万博が大勢の見物客で賑わっていたかと思うと、もう朝晩少し肌寒く感じる季節になってきた。

寒いといえば、最近、ジャンボ尾崎将司が、16億円の借金をかかえて民事再生手続きをはじめているとのニュースが流れた。一時期は向かうところ敵なしという感じで、自信満々のゴルフを見せていたのに、寒いというか寂しい話である。近年、男子ゴルフは盛り上がっている気配がない。タイガーみたいな大物を、高いお金を払って外国から招待しないとツアーの客寄せができないようだ。それに比べて、女子ゴルフは活況を呈している。私はゴルフファンではないが、女子のゴルフツアーもしばらく前は大した人気はなかったように記憶している。それがいつの間にか、宮里 藍や横峯さくらといった華のある選手がでてきたかと思うと、急に盛り上がっているのである。不動裕里もなかなか大した選手で、女子ゴルフ界をここまで引っ張ってきた一人であるが、若い二人にはそれ以上の何かがあるような気がする（オヤジへの注目

度は別にしても）、卓球という地味なスポーツも然りである。福原 愛ちゃんの人気で、なんとなく卓球界も盛り上がっているように見えるから不思議である。

わが雑誌"医療"も、盛り上がりがほしい（長年、編集委員をしている私が書くのも、"Shame on you!"と言われそうであるが）、科学の質を保ちながら、商売の点でも成功を収めている商業雑誌 Nature のかつての名編集長 John Maddox は、ある本への前書きで、"the paper in which Crick, Brenner and others showed that three consecutive frameshift mutations will rescue protein synthesis may have been the most elegant paper Nature ever published (Nature 192, 1227-1232; 1961)"と書いている。たしかに、雑誌にとって、掲載する論文は"おかず"である。編集長は、"顔"である。読者は、"顧客"である。雑誌の存続のために、この春から満を持して登場した湯浅新編集長が、何とか雑誌の継続を図り、質を向上させようといろんなアイデアを出して獅子奮迅の活躍をされておられるが、国立医療学会の機関誌である"医療"にとって、顧客が何を望んでいるのか、もし継続を望むのなら、顧客満足には何が足りないのか、そもそも国立医療学会というのは何をめざしているのか、もう一度問い直す必要があるのではないか。